

# □ 声 楽

## 小 山 晃

2016年も数多の日本の声楽家を聴けた。新進からベテランの名人、達人まで相当数になる。殊に優れた歌唱の歌手たちを採りあげようと思う。

ベテランの一人、ソプラノ本宮寛子のリサイタルはデビュー45周年のキャリアが自ずと発露されたものだった。(11月19日、王子ホール) 本宮はデビュー以来藤原歌劇団を中心にプリマを張り、特にイタリア・オペラのヒロインを多く歌い演じてきた。昨今では日本歌曲にも積極的で温蓄ある歌をきかせた。中田喜直「風の子供」など情景が豊かだった。イタリア歌曲も当然のレパートリーだが、プリマの本領を發揮したのが、ドニゼッティ〈ランメルモールのルチア〉「辺りは沈黙に閉され」。あたかもルチアがそこにいるようだった。

キャリアを重ねた、といえは〈イタリア歌曲研究会〉を長年リードしてきたソプラノ嶺貞子もその一人である。嶺は2016年に傘寿を迎えたのだが、その80年の軌跡を讀んでの〈イタリア歌曲研究会〉コンサートが行われた。(9月16日、東京文化会館) 嶺が歌うイタリア歌曲の歌唱は、決して声を張ることがなく、常に淡々としている。が、その奥行き、深さ、内容表現の豊かさは他の追随を許さない。イタリア歌曲に専念しておよそ60年、名人芸は際立っている。

ベテランの名唱といえは、2016年に東京藝術大学を退いたメゾソプラノ寺谷千枝子もそうだった。(3月19日、東京藝術大学・奏楽堂) 寺谷はドイツ・リートの名手として知られるが、この日のリサイタルで聴かせたシューマン「女の愛と生涯」、ブラームス「アルト・ラブソディ」のいぶし銀の表現が心に残る。

バリトン河野克典はいま円熟の域にある。リートの名手の一人でもあるのだが、一夕聞かせたシューベルト「冬の旅」が見事だった歌唱のひとつ。河野がこのチクルスを歌って何度目かになるのだが、そのつど表現が深まる。この日の歌唱も、詩と音楽の内核に迫り、若者の心、辛い冬の旅を明かしていった。だが、河野が若者に注ぐ眼差しは大変温かかった。

決して目立った存在ではないのだが、常に研鑽に励み、堅実を歌作りで聞かせるのが、ソプラノ岩見真佐子である。この日のリサイタルでもそうだった。(5月26日、東京文化会館〈小〉) ヴォルフ、マーラー、シェーンベルクなどを歌ったのだが、マーラー「春の朝」、「緑の森を楽しく歩いた」、ヴォルフ「恋に目覚めた女」など感情が溢れこぼれおちた。

デビュー40周年リサイタルをひらいたテノール平良栄一もいい歌を聞かせた一人。(5月13日、東京文化会館〈小〉) 40周年といえは60代になったわけだが、彼の歌唱は常に若々しいので普段は年齢を感じさせない。が、歌は充分熟した表現である。彼はイタリア物もいいのだが、昨今は日本歌曲で耳を傾けさせる。平井康三郎「祭りもどり」、「親船小船」などいい味だった。そして沖縄民謡「なりやまあやぐ」など、血が歌っていると思わせた。

平常は名古屋を本拠に活躍しているメゾソプラノ夏目久子の、東京での初リサイタルに感心させられた。(7月24日、音楽の友ホール) リサイタルはインティメートなムードを湛え、

エンターテインメントにも事欠かない。いわば夏目ワールドである。40年のキャリアで培った音楽力、表現の多様さは卓抜だった。武満徹「死んだ男の残したものは」などいって感動的。またガーシュイン「ボギーとベス」、「サマータイム」はアンニュイな名唱だった。

テノール辻裕久、ピアノなかにしあかねが続いている〈英国歌曲展〉はすでに20回になる。プリテン歌曲をはじめイギリスにも良い歌、親しみ易い歌が少なくない。が、日本ではイギリス歌曲をレパートリーにする歌手は僅かである。そうした中で、辻、なかにしがイギリス歌曲の美質を伝えてきた努力は並々ならぬ努力といえる。この日のリサイタルで歌ったプリテン「この子らは誰」など感銘ぶかい歌唱だった。(11月4日、王子ホール)

円熟の歌唱を堪能させたのが、テノール福井敬だった。(11月5日、浜離宮朝日ホール) 福井は押しも押されぬトップテノールだが、この1ヶ月ほど前にはワーグナー「トリスタンとイゾルデ」のトリスタンの大役を全うさせ、そしてこのリサイタル、そのタフさにも驚いたが、この日の歌も抜群。團伊玖磨「紫陽花」、大中恩「しぐれに寄する抒情」など情感に満ち、一方オペラものでは、レオンカヴァルロ〈道化師〉「衣装を着ける」ではリアルな演唱でカニオを存在させた。

前後してしまったが、〈シェイクスピアの世界〉とした佐竹由美ソプラノ・リサイタルが非常に充実したものだ。(10月23日、東京文化会館〈小〉) 佐竹もイギリス、アメリカ歌曲をよくする一人だが、シェイクスピア詩に付曲された歌たちを歌唱造形で明らかにした。シェイクスピアの芝居には名句、名詩、名台詞がきわめて多い。それらの詩句をまた多くの作曲家が歌曲に仕立てている。シューベルト、ビショップ、コルンゴルト、クイルター、ビーチなど大変多い。オペラでもトマ〈ハムレット〉「オフィーリア狂乱の場」などみな魅力溢れる。この日歌われたものではないが、オペラではヴェルディ〈マクベス〉や〈オテロ〉、グノー〈ロメオとジュリエット〉などがある。それはともかく、ビーチ「ヨフのシェイクスピアの歌」、コルンゴルト「4つのシェイクスピアの歌」など、佐竹の巧みな表現で聞かされると、もっと日本でも歌われていいと思った。そして、オフィーリア狂乱の場が白眉となった。

バリトン与那城敬は最近オペラの舞台でもリサイタルでも、傑出した役作り歌作りで見せ聞かせる。クイルター、ヴォーン＝ウィリアムズ、マーラーを歌ったリサイタルも進境ぶりをたっぶり聞かせた。彼のバリトンは常に円滑でストレスも一切ないのだが、この日もいって好調だったし、ヴォーン＝ウィリアムズ「旅の歌」9曲にしてもマーラー「リュッケルト・リーダー」の5曲にしても、考察の行き届いた集中力の高い歌唱だった。総じて知的歌唱といえる。特に〈リュッケルト・リーダー〉の「美しきゆえに愛するなら」「真夜中に」など胸に深くおちた。(10月25日、ルーテル市ヶ谷ホール)

例年12月のリサイタルが恒例となっているメゾソプラノ田中淑恵の〈ブラームスの夕べ〉も優れた歌を聞かせた。(12月26日、東京文化会館〈小〉) 田中もドイツ・リートの名手の一人である。以前からブラームス歌曲は一番のレパートリーと思っていたが、やはり見事な歌唱だった。「あなたの青い瞳」「セレナーデ」などのほか「ジブシーの歌」の8曲、そしてブラームスの聖歌といえる「4つの厳粛な歌」などの名歌ぞろい。「ジブシーの歌」では作曲家の庶民への温かな視線とパトスが、「厳粛な歌」では深遠な祈念が歌い出され、こちらも大変敬虔な気持ちを抱かせられた。やはり名手の名唱といえる。